教育経済建設常任委員会行政視察報告書

海老沼　利昌

〇愛知県岡崎市

大河ドラマを契機とした観光振興について

【所　見】

岡崎公園の敷地内には、岡崎城や神社、料亭、歴史資料館、土産屋、からくり時計など様々な見どころが点在している。

公園内の地面は砂利のように見えるが、動線の部分だけ砂利を固める処理を行っていて、女性や高齢者、バリアフリーにも対応していた。

大河ドラマ「どうする家康」に関する取組では、岡崎公園内に大河ドラマ館を設置し、子供から大人まで楽しめるような内容の展示になっている。

入口には大河ドラマを彷彿させるような衣装を着たスタッフが観光客を歓迎し、入館の際にステッカーを配布しており、このステッカーは何種類も用意されていて、コレクション要素があり何度も足を運んでほしいという思いが感じられた。

大型モニターによる様々な演出がとても印象的であり、出演している俳優陣をアフレコに使うなどファンが喜ぶ演出が施されている。

周知に関しては、ブランディングがしっかりしており、様々な媒体でＰＲ活動を行っていて、ターゲット層を絞りＳＮＳの発信やインフルエンサーによる発信など、今時の方法を活用し、若者への周知も行っていた。

ただ発信するだけでなく、データを収集し、根拠に基づいた集客方法を実践しているのは本市にとって必要な課題である。

施設内では多くのスタッフを配置していて、館内の説明やトイレの案内など「おもてなし」のサービスが行き届いていた。

本市の「足利氏のふるさと」ツーリズム観光誘客推進事業も、様々な年齢層に楽しんでもらえるようブランディングとデータを活用した周知を実施するべきだと感じた。

○愛知県瀬戸市

小中一貫校について

【所　見】

にじの丘学園は「課題の発見・協働・情報収集・対話・表現」を教育活動の軸に掲げており、「協働型課題解決能力」の育成に力を入れている。

平成２６年に瀬戸市小中学校ＰＴＡ連絡協議会による「適正規模適正配置の推進を求める要望者」の提出から、令和２年４月の開校に至るまでの短期間で、保護者への理解を深める様々な取組を行っており、「学校ができた後のイメージ」をしっかりと住民に伝える事が重要だと感じた。

学習課題を設定する際の工夫の一つとして、異学年での合同授業を行い、学習課題に必然性を生み出している。

教員同士も施設一体型小中一貫校の利点を生かし、研究授業の小・中合同での実施、中学校教員による小学校への乗り入れなども行っていて教員の負担を軽減している。

通学には生活路線バスを活用しているが、バス代に年間6,000円かかり、子供が多い家庭では負担だと感じた。

豊田市が近いこともあり、新しい学校に魅力を感じて移住なども増えているが、豊田市に同等の小中一貫校が出来た場合は、生徒数を維持できるのか疑問に感じた。

本市の出生率を考えると、市内に住む子供だけでは学校を維持することは難しく、市外からも通いたくなるような特色と魅力のある学校にする必要がある。

小中一貫校は、転入や転校する児童にとって応用がききにくいことが懸念され、中学校から進学する場合や、中学校受験などの対応が難しくなることが課題に感じた。

本市には史跡足利学校があることから、日本最古の学校がある利点を生かし、特色のある学校が出来ることを期待する。